

コーラル城の平穏な日々

デルフィニア戦記外伝2

茅田砂胡

Sunako Kayata

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

D 挿 口
T 画 絵
P
ハ 沖
ン 麻
ズ 実
・ ミ
ケ 也

目 次

ポーラの休日	5
王と王妃の新婚事情	113
シェラの日常	121



ポーラの休日



それはデルフィニアとタンガ両国の国交回復記念式典が無事に終わり、めでたくもラモナ騎士団長とエンドーヴァー子爵未亡人のラティーナとの結婚が正式に決まったある日のことだった。

デルフィニアの国王はいつものように芙蓉宮で晚餐ばんさんを楽しみながら、おもむろに切り出した。

「たまにはゆっくり休んではどうかな？」

この時、芙蓉宮の女主人であるポーラは、絶妙の焼き具合に仕上がった雉肉きじにくを国王のために切り分けようとしていたところだったが、きよとんとなつて不思議そうに問いかけた。

「それはあの、テス夫人やメアリを休ませてやれという仰せでしょうか？」

「違う、違う。ポーラがだ」

「わたしがですか？ ですけど、わたしはお休みをいただくようなことは何もしておりませんのに」

大真面目に言われて、デルフィニア国王ウォル・グリークは苦笑を禁じ得ない。

ポーラ・ダルシニは国王の愛妾あいしやうである。

だから今も二人きりで晚餐を楽しんでいるのだが、ここまでこぎつけるのは大変だった。

芙蓉宮に迎えられた当初などは、国王が芙蓉宮を訪問している間は絶対に腰を下ろそうとしなかった。食事中ともなればなおさらである。

陛下がお食事を召し上がっているのに座り込んでいるわけにはいかない、畏れ多いと言うのだ。

自分は台所で料理に専念する、さもなくば給仕に徹すると言い張ったが、それでは愛妾の元を訪れた国王が一人で食事を摂ることになってしまう。

結局、ある意味では国王以上にポーラに影響力を持っている王妃が笑いながら、

「その陛下と一緒にご飯食べてくれて言ってるんだから問題ないじゃないか。国王の愛妾なら国王の希望を聞いてやるのも仕事のうちだぞ」

と言ひ聞かせ、ポーラはおつかかなびつくりながら、ウォルと向かい合はせに座るようになったのだ。

それでも最初は大変だった。

表情も身体も硬く強張つて、ろくに食べ物の味もわからないような有様だったが、この頃はようやく打ち解けてきたのか、食事中に笑顔も見せるようになってゐる。

「休みはいらないというが、ポーラは城へ来てからずっとこの芙蓉宮に詰めてゐるではないか」

「はい。だって、それがわたしの務めですもの」

実質上は夫婦でありながら、ポーラはあくまでもウォルに仕える側女そばめとしての立場を崩さない。

国王の愛妾ぜいなくという地位を得た女性が当然のように望む贅沢ぜいたくな衣裳も豪華な宝石も、特別あつかいさえ、ポーラは笑つて退けていた。

彼女が望んだのは何よりも国王の傍にゐることだ。ポーラは料理も得意で、針も器用に使う。愛情を込めて、日々国王の身の回りの世話に励んでおり、

それを喜びとしていたのである。

「そうだな。ポーラが働き者なのは承知しているが、一年中、俺の世話ばかりでは退屈だろう」

何気なく言つたこの言葉に愛妾は顔色を変えた。

「退屈だなんて、決してそんなことは……」

国王も慌てて謝る。

「いや、すまん。どうも俺は言葉がまずくていかん。ポーラが俺の世話をしてくれるのは非常に嬉しいし、助かっているし、ありがたいとも思っているのだ。本当だぞ」

この宮へ来れば政務を忘れて、一時いっときでもくつろぐことができる。家庭の団欒だんらんを味わうことができる。

自分は当たり前前に働いているだけだと思つてゐるポーラは知らないが、これは国王にとつて予想外に大きな喜びであり、幸福感にもつながつた。

だからこそ、その働きに報いたかつたのである。「俺ばかりが幸せを感じているのは不公平だからな。ポーラにもたまには気晴らしをしてほしいのだ」

「はあ……」

自分は陛下のお傍にいられるだけで幸せなのにと
思いながら、生返事をして頷いた。

「ですけど、陛下。気晴らしを勧めるのでしたら、
わたしなどより王妃さまが先では？」

「あれは俺がわざわざ勧めなくても勝手にしている。
今でこそ西離宮に落ち着いているが、かつては何ヶ月も顔を見ないことも珍しくなかったのだ。しかし、
ポーラに何ヶ月も城を留守にされたのでは俺が困る。
そこで妥協案だが、一日、この離宮を離れて、市内
見物でもしてきてはどうか」

デルフィニア国王の愛妾としての日常は、決して
楽なものではない。

重臣の夫人たちとの女同士につきあいはもちろん、
公式の場にも顔を出し、外国の要人たちの接待にも
あたらなければならぬ。特にここ最近、何かと
心労の多い日々が続いていたはずだ。

少しでも労^{ねが}ってやりたいという国王の気持ちを汲^く

んだのか、ポーラはようやく顔をほころばせた。

市内見物というのは確かに嬉しい。

小身の地方貴族の娘に生まれたポーラにとって、
コーラルはずっとあこがれの大会だったのだ。

今はその頂点である王城に住み暮らしているが、

ポーラはそのコーラルを一度も見物したことがない。

「ありがとうございます。それではあの、お言葉に
甘えて街を見物に行ってもよろしいでしょうか？」

「もちろんだとも。馬車も供の者も用意させるぞ」

「とんでもない。自分の足があるんですから歩いて
参ります」

国王はまた苦笑した。

「せめて城内くらいは馬車を使ってもらいたいな。

この宮から大手門までは優に二カーティヴはある。

そこまで徒歩で下りて、さらに市内を見物して歩き
回ったりしたら足を痛めてしまうぞ」

「あら、わたしは山育ちですもの。平たい町中なら
いくら歩いたって足が痛くなったりしません」

「しかし、足がむくんで太くなるだろうに」

「平気です。わたしの足はもともと馬車馬のように丈夫で太いんですから。それとも、あの……」

言葉を呑み、国王の顔色を窺^{うかが}いながら、ポーラはおそろおそろ問いかけた。

「陛下は足の太い女はおきらいでしょうか？」

「いいや、この雉のような骨と筋だけの足などより、よほど健康的でよいと思うな」

王妃が聞いたら『もうちょっと気の利いた台詞^{せりふ}は吐けないのか』と文句を言うところだが、ポーラは国王の言葉に安心したらしい。

にっこり笑って頷いた。

翌日、アランナが芙蓉宮に遊びに来た。

アランナはラモナ騎士団長ナシアスの妹であるが、出身も嫁ぎ先も小身貴族にすぎない。

本来ならば国王の愛妾と親しく交際できるような身分ではない。腰を低くしてポーラの『機嫌窺い』に

来る』のが筋だが、二人は非常に仲がよかった。

ポーラも小身貴族の出身だったから話も合うし、気心もわかるのだ。

「陛下のお許しを得てコーラル見物に？」

「ええ、アランナさまもご一緒に参りませんか？」

正直言つて、わたし一人ではコーラルのどこを見て回ればいいのかもわからないんです」

「もちろんですとも。まあ、嬉しい。子どもたちはマリアに預けて参りますわ」

アランナは大はしゃぎだ。

二人は熱心に針仕事をしながら話に興じていたが、アランナはその手を止めて考え込んでいる。

「どこを見て回りましょうね。舞台劇？ 演奏会？ そうだわ。いっそのこと奇術などはどうでしょう。まだ南にいた時、何度か見たことがありますけど、なかなか凝^こったものでしてね。人が剣を呑んだり、火や水を操ったりするんです。きつとポーラさまもびっくりなさると思いますわ」

「おもしろそうですね、アランナさま。そういう出し物は陽が暮れてから行われるものでは？」

ちよっと心配そうに言ったポーラに、アランナは驚いて眼を見張った。

「まあ、ポーラさま。では、昼間に出かけて夜には戻るおつもりですか？」

「ええ。コーラルは中央でも一番大きな街ですから、その賑わいを一度は見たいと思っていたんですけれど、陽が暮れてから奥さまをお借りするのではご主人に申し訳ありませんもの」

明るいうちしか見て回らないのでは大都会の持つ楽しみの半分も味わえないことになるが、ポーラはそれで充分だと思っていた。

見たい芝居や出し物があるのなら、最初からそう言つて国王に連れていってもらえばいい。しかし、妻が夫を置いて『夜遊び』をするのは感心しない。

大貴族の夫人たちが聞いたら鼻で笑つただろうが、ポーラはそう考える階級の出身だったのである。

そして、ありがたいことに、アランナもポーラの意見に賛同するだけの慎みを持った女性だった。

「もつともでした。わたしの留守中にピサロが妙な考えを起こさないとも限りませんし、早々に戻つて監督しなくては」

悪戯いたずらっぽく言つて、また考える顔になる。

「昼間の市内見物だと、やっぱりお買い物を中心にしたほうがいいのかしら。市場を一通り見て回つて、せっかくですから魔法街に行つてみませんか？」

「魔法街？」

ポーラには初めて聞く名前だったが、アランナは眼を輝かせて手を打っている。

「そうだわ！ 昼のコーラルを見物するならここを外す手はありませんもの！ わたしも行つたことはないんですけど、一年中お祭りのようなところ、普通の町中では見たこともないような珍しい品物も売っているし、大道芸人もたくさんいるんですって。きつといい気晴らしになりますわ」

「不思議な名前ですねえ。魔法街ですか？」

「ええ。有能な占い師や祈禱師きとうしが集まっているのでそう呼ばれているそうです。噂うわさでは本当に魔法を使う者もいるとか……、夜になると街のあちこちで謎めいた呪文が聞こえるんですって」

芝居気たつぷりに陰かげしい表情をつくるアランナにポーラもつられて声を低めた。

「そんなところに出入りしても大丈夫でしょうか。」

何やら物騒なところなのではありません？」

アランナは笑って首を振った。

「心配なすることはありませんわ。今のはあくまで暗くなつてからの話で昼間は大変な賑わいですからこれも噂ですけど、このお城にお屋敷を構えているような貴婦人方も、身分を隠してこっそり魔法街を訪れたりするのですって」

かく言うアランナも『陛下直々にお城に屋敷を賜たまわった貴婦人』なのだが、その事実の頭に入っていないらしい。

一方のポーラもポーラで、

「そんな深窓の奥様方が直々にお忍びでお出かけになるんですか？」

自分はそれより身分の高い国王の愛妾なのだとほまるで気づいていない様子で、眼を丸くしている。

「何でも悲しい人の心を占ってもらったり、思いが成就する呪法を施してもらったりするんですって。

時にはもっと大胆な手段を頼んだりもするとか……。今だから白状しますけど、わたしもその神秘の力に頼ろうかって真剣に思い悩んだことがあるんですよ。もちろん、わたしが使うわけじゃありませんけど」

急いで前置きして、アランナはちよつと笑った。

「今にして思えば無茶なことを考えたものですけど、兄があんまりぐずぐずしているものだから、わたし気が気じゃなかったんです。お義姉ねえさまなら兄にはもったいないくらいの方ですし、互いに思い合っていることも明らかでしたし、こういう時には殿方のほうから積極的な態度に出るのが当然ですね。

それとなく兄を励ましてはいたんですけれど、ひどくじりじりさせられる日々が続いて、あんまり心配で、わたしとしたことが料理の味付けも間違えるような有様でして、こんな思いをするくらいなら、いっその街で惚れ薬ほぐすりを手に入れて兄に飲ませたほうが早いんじゃないかと思っただんです」

「そんなものまで扱っているんですか!」

「ええ。効能あらたかだと大変な評判のようです。

その分とても高価な品物みたいですから、我が家の台所では手が届かないのはわかっていたんですけれど、その必要もなくなつてほつとしました」

実の妹のアランナが大真面目にそんな強硬手段を考えるくらい、ラモナ騎士団長ナシアスとエンドーヴァー夫人との恋愛は遅々として進展しなかった。

業ごうを煮やしたバルロさまが強権を発動してくださらなかったら（ティレドン騎士団長が筆頭公爵の身分を全面的に表に出してナシアスに圧力をかけることをアランナはそう呼んでいた。ナシアスが以前、

『強権発動もいいところだ!』と珍しくもバルロに憤慨ふんがいしていたところから覚えたのである）いったいどうなっていたことかと、アランナは嘆息たんそくした。

兄は親友の口出しを不満に思っているようだが、この場合、誰が見たつてバルロが正しいし、兄には反論の余地はないとアランナは固く信じていた。

同時に心からバルロに感謝していた。

何やら考え込んでいたポーラが顔を上げ、ひどく真剣な口調でアランナに問いかけてくる。

「その惚れ薬というのは、意中の殿方の心を自分に向けさせるものですか?」

「はい。宮廷婦人の遊びの一つなんだと思います。もちろん秘密の遊びですけど」

アランナの口調はちよつと苦い。

夫一人を心から愛しているアランナにはそうした遊びが理解できないのだ。もっとも宮廷婦人たちもこの楽しみを拒絶するアランナを『おかわいらしい人だこと』と言って笑うだろう。

「その薬、効果はどうなのでしょう?」

「わかりません。本当に確かめたわけではないので。今のはみんな噂で聞いた話なんです」

「こういう種類のものなのでしょう。たとえば——使用した本人と特定の殿方との間を強く結びつける効果しかないものなのか。それとも、特定の女性と男性を結びつけたりする応用が利くのか……」

アランナは驚いて問い返していた。

「ポーラさま。まさか、それを陛下に飲ませようとおっしゃるんですか?」

ポーラは飛び上がって、慌てて首を振った。

「とんでもない! わたしは充分すぎるくらい幸せですもの。ただ、今のアランナさまのお話が……」

「どの話ですか?」

「お二人とも互いに思いを寄せていらつしやるのに進展しない、こういう時は男性のほうから歩み寄るべきだというお話です。それがまるで……」

話しながらも手は動かししていたポーラだが、針を

持つ手を止めて、そつと囁いた。

「あの方たちにも当てはまるような気がして……」

アランナも納得して頷いた。

愛嬌あふれる丸い顔と小柄な体軀のおかげで、二児の母となった今でも少女のような雰囲気だが、アランナは実は聡い人である。

「シャーミアンさまと独騎長さまのことですね?」

「ええ。あのお二人なら本当にお似合いですのに、どうして独騎長さまは……」

苦しそうに言葉を呑み込んだポーラだった。

あの黒衣の戦士とドラ伯爵家の令嬢との縁談は今、宙に浮いた形になっている。

まとまったのではない。

破談になったのではない。

一時保留という扱いらしいのだ。

それも、王国の英雄であるドラ將軍が直々に娘をもらつてくれと申し入れたにも拘わらず、イヴンのほうがいい返事をしなかったのだという。

この顛末はポーラには理解に苦しむことだった。

ポーラはイヴンやシャーミアンについてそれほど詳しく知っているわけではない。

相手は何しろ国王の親しい側近であり、名門ドラ伯爵家の一人娘である。

一年前までのポーラにとっては、まさに雲の上にいるにも等しい人々だったのだ。

しかし、ポーラが芙蓉宮に入ることになった時、イヴンはとても喜んで温かく迎え入れてくれた。

シャーミアンはポーラのことを歯牙しがにもかけない貴婦人が多い中で、親しい友人にするように優しく接してくれた。それ以来、二人とも何かと気を使い、親切にしてくれる。いくら恩義を感じても足りない人たちなのである。

その二人の縁談がまとまりそうでまとまらないうちに聞いた時から、ポーラは密かに心を痛めていた。

それは言い換えれば、煮え切らない態度を示したイヴンに対する非難の気持ちでもあった。

願ってもない良縁なのに、どうしてすぐに返事をしなかったのか、どうしてシャーミアンの気持ちに徒いたずらに傷つけるようなことをするのか……。

ポーラはシャーミアンに好感を持っている。

イヴンのこともすばらしい方だと思っている。

それだけに本当に不思議だったし、立派な殿方のなさることではないと、少しばかり不満にも思っていたのである。アランナもイヴンの態度には不審を感じていたようで、独り言のように呟つぶやいた。

「まさかとは思いますが、独騎長さまはシャーミアンさまを気に入らないから、シャーミアンさまに何らかの不満や瑕きずを感じているから受け取らないというのではありませんよね？」

「そんなこと！」

思わず声を上げてしまったポーラだった。

「シャーミアンさまはドラ將軍のご令嬢で、何度も陛下と戦場を共にされた女騎士でいらっしやいます。わたしが申し上げるのも失礼ですが、本当にお心の

優しいお美しい方でいらっしやいます」

「わたしだつてそう思いますとも」

「ラティーナさまがナシアスさまにふさわしい方であるように、それと同じくらいシャーミアンさまはイヴンさまの奥方にふさわしい方のはずです」

「ええ。何より陛下のお取りなしまであったのに、独騎長さまは何を洪つていらっしやるんでしょう。お年頃もご身分も釣りあうお話ですのにね」

二人ともイヴンのもう一つの顔を知らない。

国王の親衛隊長として王宮に出入りしているその人が、実は夜盗・山賊まがいの一団を率いる長でもあるとは夢にも思っていない。

ポーラは真剣な顔つきで、さらに言う。

「ですから、試してみる価値はあると思うんです。出過ぎた真似かもしれませんが、何だかじつとしていられなくて……」

「お気持ちはよくわかります。シャーミアンさまがあんまりお気の毒ですもの」

「では、アランナさま」

「ええ、ポーラさま」

奇妙な団結意識を発揮して、二人はしっかりと手を握り合つた。

こうして、ポーラの外出の主要目的は、

「イヴンに飲ませるための惚れ薬を買いに行く」

という、国王や王妃が聞いたら悲鳴を上げそうな代物に決定したのである。

知らぬは本人ばかりなりとはよく言つたもので、イヴン自身はシャーミアンとの縁談をやんわりと、しかしながら毅然と断つたつもりだった。ところが、話を終わりにしたと思つてゐるのはイヴンだけだし、断られたかもしれないと思つて落ち込んでゐるのはシャーミアン一人だけである。

何と言ってもシャーミアンの父であるドラ将軍がすっかり乗り気になつており、イヴンの父親代わりを任じてゐるジルともがつちり手を組んでゐるのだ。

この二人は最近すっかり親しい茶飲み仲間である。今日もドラ將軍は、イヴンより一足先に若い妻をもらうことになったジルのために祝いの品を調え、直々にタウの官舎を訪れていた。

「祝儀とは言え、貴君にこのようなものを贈るのはいささか面映ゆいのだが……」

苦笑しながら將軍が差し出したのは式典用の馬装一式である。

黒塗りに銀で象眼ぞうがんを施した鞍くらと鐙あぶみ、金欄きんらん緞子どんすで仕立てた飾り帯、銀糸を編み込んだ緋色の胸懸むながけなど、豪華できらびやかな最高級の品々だ。

ドラ將軍の領地は馬の名産地として知られており、さすがに職人の技も一味違っているが、ジルの住むタウも馬の扱いにかけては引けを取らない。

たとえば言うなら機織はたおりの名手に織物を、名匠と言われる刀鍛冶かじに刀剣を贈るに等しいとドラ將軍は謙遜けんそんしてみせたのだが、ジルは笑って首を振った。

「我々の技術はあくまで実用品において發揮されて

いるものですから、これほど絢爛けんらんなものはありません。つくろうとしたところでできるものではありません。ありがたく頂戴ちやうだいいたしましょう」

「かたじけない」

ドラ將軍は軽く頭を下げた。

実際、現在の王宮において、タウの領主としてのジルの地位は決して低いものではない。いずれこうした美々しい礼装も必要になるはずだった。

がっしりした若者が將軍とジルに茶を運んできて、一礼して下がつていく。

「あの若者はおらぬのかな？」

イヴンの姿が見えないことを訝いぶかしんだドラ將軍に、ジルはまた苦笑した。

「將軍が直々にお出ましになるというのに、あれがじっとしているわけがありません。とつくに逃げ出しましたよ」

「なんと。嫌われたものだ」

「それは冗談としても一昨日から戻りません」

「ほう？」

將軍がちよつと眼を見張る。

ジルは今度はにやりと笑った。

「うちの若い者が言うにはシッサスで見かけたとか。將軍には申し上げにくいことですが、馴染みの女のところにでも居続けているのではないかと……」

將軍は豪快に笑つて膝ひざを叩いた。

「遊び納めというわけか。それもよからう」

娘婿むすめこにわがと考かんえている男の多少の不行状ふぎようじようを聞かされたところで動じるような將軍ではない。

イヴンは以前は大陸の各国を放浪し、海賊の仲間入りをし、賞金首になったこともあるとまで自分で言っている男だ。そうしたことをすべて承知の上で、將軍はイヴンを娘婿にと見込んだのである。

今さら見変えるつもりはなかった。

「ところで、ジルどのはこの度、若い奥方をもらう運びとなつたわけだが、タウの跡目はどうされる？奥方が男子を産んでくれた暁には、その子を次代の

領主に据えるおつもりか」

「これは、難しいことをお尋ねになりますな」

將軍が本当は何を言いたいかを察しているながら、ジルは笑つて答えをはぐらかした。

「確かにタウの領主ということになっておりますが、實際は面倒ごとを嫌つた年寄り連中にむりやり押しつけられたようなものです。わたしは王様と多少の馴染みがあるから、王宮との橋渡し役に適しているだろうという理由でね。その程度のものであります。よその土地の方には『領主』の名目を得たわたしがタウの所有者に見えるのかもしれませんが、タウにおけるわたしの立場を申すなら、あくまでベノアを代表する頭目であり、二十人いる頭目のまとめ役にすぎません。そのわたしが誰かを次のタウの領主に据えたいと希望したところで、仲間の反対に遭えばそれまでです。わたしの一存では何もできません。昔も今もタウは誰のものでもなかった。これから決して誰か一人のものにはなりません」

「これは、一本参った」

將軍は素直に頭を下げた。ロアの領主である父の跡を継ぎ、領地を守ることが使命と教育されてきたドラ將軍には受け入れがたい思想だが、それでも、ジルの言葉には清々しいくらい信念を感じ取れた。「しかし、そんなジルどこの薰陶くんとうを受けたかゆえに、あの若者もあのような一徹者いつてつものになったかと思うとな、少々恨みがましく思わぬでもないのだ」

「わたしのせいにされては困ります。あれの気性はタウに顔を見せた時から少しも変わっておりません。將軍が責めるべきはあれの父親のゲオルグでしょう。言い出したら引かないところなどよく似ています」
「その仁じんのことは陛下じんのからも伺うかがった。スケニアから来たという森の巨人のことだな」

「ええ」

二人はタウの南峰で摘み取ったお茶をゆつくりと楽しんでいた。

將軍がふと苦笑して言う。

「我が娘の人生が懸かっていなければ、あの若者の態度は潔いさよしと誉めてやつてもよいくらいなのだ……うまいかんものだ」

ジルも笑いを噛かみ殺している。

「いい意味で意固地な奴だと思つてやってください。少なくとも、お嬢さんの身分や財産を利用して成り上がつてやろうなんて気はあの男にはないんです」
「うむ。希有けうなことだと思つている」

自分の腕や容姿に自信のある若い男なら、普通はそれを武器に成り上がることを狙うものだからだ。

お茶を飲みながら、ドラ將軍はもう三十年以上も前に見た一人の若者を思い出していた。

その頃のドラ將軍は十五か六だったろう。

無論將軍などではなく、爵位を継いでもおらず、ただひたすら剣術と馬術の修業に明け暮れ、身体を鍛え、技を磨くことに専念していた。自らに確実に力がついて成長していく、その過程がおもしろくてたまらなかつた頃で、まだまだ血氣盛んなエミール

少年だった。

ロアで開かれた馬術大会に飛び入りで参加して、見事な技で名だたる強豪を一人残らず退け、優勝をさらっていったその若者はエミール少年より一つか二つ年上だっただろう。

細身ながら鋼はがねのように引き締まった体軀だった。獣けもののように敏捷な身のこなしが印象的だった。

馬自慢のロアの男たちが感嘆するほど巧みに馬を駆り、槍やりを操さくってみせた若者の手腕に、会場からは驚愕きょうがくの大歓声が上がった。まだ健在だった將軍の父、当時のドラ伯爵も感嘆の声を発したものだ。

「見ない顔だが、何者か？」

父の傍に控えていたエミールもまさに同じことを思っていた。その問いに答えたのは誰だったか……。

「おお……あれは確かポリシアの、ベリンジャーのジオルダンです」

その名前にエミール少年はさらなる興味を覚えた。デルファイニアの大穀物庫こくもくであるポリシア平原の、

あれが次の領主かと納得もしたし、自分もいずれはロアという大きな領地を継ぐ身であるだけに、この機会に言葉を交わしてみたいと思った。

ドラ伯爵も、凜りんとした色白の美少年でありながら、大の男も顔負けの技倆を見せて馬術大会に優勝したジオルダンに興味を覚えたらしい。

心からの褒賞ほうしょうの言葉を掛けるとともに、ロアの屋敷に立ち寄るようにと誘ったのだが、伯爵の前に立った若者の態度はひどく不遜ふそんだった。

「ほんの腕試しに出ただけのこと」

物騒なまでに鋭く眼を光らせて、褒賞されるのが煩わしいとばかりの態度で伯爵の誘いもつつけんどんに断り、挙げ句の果てには、

「馬にかけては中央一だというロアの衆もたいしたことはないな」

吐き捨てて背を向けたのだ。

こうなつては好感情など持てようはずもない。

エミール少年は自分の顔が怒りのあまり真っ赤に

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。